

Homage

Professor Emeritus Akira Hoshino (1927–2015)

去る2015年11月7日、教育研究所元所長であられた
星野命名誉教授（88歳）が逝去されました。

研究所といたしまして、ここに謹んで哀悼の意を表します。

Professor Emeritus Akira Hoshino, former director of IERS,
former Professor of Psychology, passed away on November 7, 2015.

IERS expresses its condolences.

MAHER, John C.
Director of IERS

在りし日の星野先生

In Remembrance of Prof. Akira Hoshino

栗山 容子 KURIYAMA, Yoko

● 国際基督教大学名誉教授
Emeritus Professor of International Christian University

星野命先生の突然の訃報に接しましたのは、現在カナダ・ハリファックス在住のD. W. ラッカム先生からのEメールでした。2014年にいただいた賀状で、11月に肺炎で入院され、半月の治療で回復されたとのことでしたが、今年年頭にいただいたご挨拶ではいつもとお変わりありませんでしたのに…。

最後にお会いしたのは2011年の秋だったと思いますが、ICU心理学研究室の創設55周年記念の文集を編む打合せのため金沢から上京された時のことです。原一雄先生や卒業生との集まりで、私は東京においでになることを知りませんでした。研究室のドアがノックされ、ひょいと顔を出されたのが星野先生でした。ビックリするのを楽しんでいらっしやるようなところがあって、その時の茶目っ気たっぷりのご様子が今でも目に浮かんで参ります。端正なロマンスグレーの姿からは想像し難いことですが。そういえば研究休暇をいただいて南ロンドンに滞在していた時のこと、訪英の折に立ち寄られると伺っていましたものの事前に連絡はなく、到着の電話を待ちながら掃除機をかけていましたら、何やら玄関のところに人影が…ガラス窓越しに笑っていらっしやる先生のお顔がありました。住所だけを手に空港からタクシーで直行されたそうです。

先生は1990年にICUを退任されて、北陸学院短期大学学長としてふるさとの金沢に赴かれましたので、ご一緒したのは10年ちょっとです。当時の心理学研究室は他に原一雄先生、故都留春夫先生がおいでになり、二回りほど年の差がありま

したので、相応の役割や担当も少なくありませんでしたが、頼れるところがあるという安心感があったように思います。私が退職の折、研究室で一緒だった時のあれこれを想いおこしながら、私信を寄せて下さいました（ロンドンでの再会の思い出も！）。その中で、研究室ではいろいろ意見の相違もあったが、仲介があって有り難かったと記されていました。当時は毎週火曜日ランチタイムに研究室会議があって、重要な案件から学生の個人的な問題まで様々な議題がありましたが、それぞれが思う考えを率直に発言すれば、おのずから意見の違いが表面に出てきます。1つに、リベラルアーツとしての心理学の基礎と大学院の専門性を繋ぐカリキュラムの構成を巡って、星野先生が社会、人格・臨床、生物・神経、教育、基礎心理、方法や測定などの要素を『三つ輪案』と『四つ輪案』というイメージ図に示されて、幾度となく議論したことがあります。その結果がどう落ち着いたのか、今は記憶が曖昧になっていますが、個人的にはその時のリベラルアーツとは…、専門性とは…という大学理念に繋がる議論は、その後の心理学プログラムを考える上での大きな指針になりました。次の世代の心理学研究室の動向を考えますと、このときの意見の対立はさざ波くらいだったかもしれませんが、真摯な緊張感に満ちた会議は今でも身体が覚えているような気がします。そうした中で、緩和剤になって和らいだ雰囲気で見え方を交わすことができたと感じて下さったのは思いがけないことであり、有り難く思っています。

1979年着任して間もなくの頃、理学館を会場に星野先生が大会準備委員長を努められて日本社会心理学会第20回大会が開催されています。教員の少ない小さな研究室でこういった全国的な大会の当番校になることは大学研究室が認知されるよい機会でしたが、準備は相当に大変だったはずです。当時原先生は研究休暇中で、帰任されてから大会で采配を振るわれましたが、多くは卒業生や学生たちが馳せ参じて、先生の統率力、牽引力で本大会を成功させたことが思い出されます。先生には人を惹きつける魅力がありました。話し上手、書き上手でもありました。1986年にも準備委員長として異文化間教育学会第7回大会を主催されています。当時の先生の研究室は1階から上階まで見通せる3階の右側で、積まれた書類の間から顔を出されていることもありましたが、席が温まる間もなかったでしょう。

先生の遺された業績や様々なご貢献については中野照海先生が「ICU教育研究51」にまとめて下さっています。またその後先生ご自身がまとめられた2010年刊「星野命著作集I 人間性・人格の心理学」、「II 異文化間教育・異文化間心理学」、「III 心理学 その境界を越えて」全3巻には先生の長年の学究生活で書かれた著書や研究論文から、折々に文章にされた講演録や論評、交友録まで、広く収められています。このサブタイトルからもわかるように、ご関心は社会心理学という枠にとどまらず、異文化間心理学やコミュニティアプローチへ、人格・臨床の枠にはまらずに、人間性の心理学やいのちの電話の実践的活動へと広く、深くその境界を越えていきます。しかし、ご自身はそういった必然的ともいえる研究対象の広がりに対して、方法の上で「科学でない」との批判にあって、『客観的因果論的説明にならない』…「境界を踏み越える研究」とみなされることを恐れていた』と述べています。今日、このような心理学の対象領域は一般に認識され、受け入れられて、さらに発展しています。その意味では、科学という名のもとでの狭義の心理学にとどまらない心理学の境界を踏み越えたパイオニアと位置づけることもできるように思います。そういったご功績が

2013年の日本心理臨床学会第32回大会で、平成25年度学会賞を受賞された理由にあったのではないかと推察しています。私にはいずれの領域においても先生のヒューマンイズムの精神がその本質にあって、ICUの理念が顕現しているように思われるのです。

クリスマスシーズンの賑わいが聞かれるこの時期、年に一度、金糸と朱糸のクリスマスツリーが刺繍されたテーブルセンターを出してきます。30年も前にドイツの学会帰りの先生からいただいたもの、今は亡き在りし日の先生を偲び、感謝を捧げます。

